

〈論文〉

中国語領有者比較文 “X 的 N 比 YW” の形成メカニズム — 主述述語文を指標として —

平山邦彦

要 旨

中国語比較文には、被領有者 N を基準として領有者 X/Y を比較するものがある。本稿では領有者比較文と称す。その中でも“X 的 N 比 YW” タイプの形成メカニズムを本稿の着眼点として議論を展開した。これに対し、意味的ベースとなる主述述語文を指標として考察を行った。当該タイプは、主述述語文と比較対照してみる時、構造的にも成立容認度においても特異な性格が見られる。この点は、主述述語文の形成メカニズムが大きく反映されたタイプ“X 比 YNW” との対比してみると分かりやすい。考察の結果、“X 的 N 比 YW” タイプの次の特徴を明らかにした。(1) 比較文成立には被領有者 N による意味節点機能、領有者 X/Y と被領有者 N における「全体—属性部分」関係が必要条件となる。(2) 意味節点機能と「全体—属性部分」の認知フレームは主述フレーズから“X 的 N 比 YW” への拡張の筋道を辿っている。

キーワード：領有者比較文；意味節点；全体—属性部分；主述述語文；拡張

1. 問題提起

中国語の比較文には被領有者 N を比較点として領有者 X と Y を比較するものが存在する。代表的な二種を挙げておく。

A. X 的 N 比 YW (X の N は Y より W)

(1) 我的年纪比他大。(私の年齢は彼より上だ)

B. X 比 Y NW (X は Y より N が W)

(2) 我比他年纪大。(私は彼より年齢が上だ)

X/Y と N の間に「領有者—被領有者」の関係が成り立つ比較文には2種が存在する。一方は、被領有者が比較対象となるパターンである⁽¹⁾。もう一方は、領有者が比較項となるパターンである。先述の通り、タイプ A とタイプ B は後者の伝達機能を有す (朱徳熙 1982: 189-190, 1983, 孟維智 1987, 范晓主编 1998: 189, 许国萍 2007)⁽²⁾。以上の伝達の特徴から、本稿では後者のパターンを領有者比較文と称す。本稿は領有者比較文中でもタイプ A の形成メカニズムを主眼として論じる。領有者比較文の伝達機能から見る時、タイプ B と比べタイプ A は(1)(2)の点で特異な性質を持つ。

(1) 構造上の基礎と意味的基礎に不一致が見られる。

上の点について、構造的基礎 (A') と意味的基礎 (A'') を提示すると次のようになる。

A' X 的 N W (X の N は W)

(3) 我的年纪大。(私の年齢は高い)

A'' XN W (X は N が W)

(4) 我年纪大。(私は年齢が高い)

タイプ A は“比 Y” (“比他”) が W (“大”) の前に状語として用いられている。よって、構造的には、“X 的 N” (我的年纪) を主語とした主述

(1) 当該タイプには“X 的 N 比 Y 的 W” (X の N は Y より W) [例. 他的书比我
的有意思 (彼の本は私のより面白い)] が該当する。

(2) 更に代表的なタイプに、“X N 比 YW” [例. 我年纪比他大 (彼は私より年齢
が高い)] が挙げられる。本稿では、議論の対象としない。

フレーズである。これを比較文のレベルに消化すると“我的年纪”（私の年齢）と“他”（彼）の両者が比較項と見なされる。一方で陳述の対象が被領有者 N ではなく領有者 X という点から見ると、主述述語文 XNW（我年纪大）を意味的基礎に置いている。比較文のレベルに消化すると“我（私）と“他”（彼）の両者が比較項と見なされる。

この点は、タイプ B と異なる。

B' $\underline{X}N W$ (\underline{X} は N が W)

(5) 我年纪大。(私は年齢が高い)

B'' $X\underline{N} W$ (X は \underline{N} が W)

(6) 我年纪大。(私は年齢が高い)

タイプ B は、構造的にも意味的にも基礎が一致している。何れの面でも主述述語文 XNW（我年纪大）が基礎となる。構造的に自然なリンク関係が見出される。比較文のレベルに消化すると“我（私）と“他”（彼）の両者が比較項と見なされる。

(2) 文容認度において、意味的基礎となる主述述語文と差異が見られる。

タイプ A とタイプ B の容認度については、平山 (2010, 2011, 2013a, 2013b, 2014) で言及されている。それぞれが成立に至る必要条件が主眼に置かれていた。必要条件認定のプロセスにおいて何れが有標的なものかという議論は見られなかった。本稿ではタイプ A を有標的なものと考えている。一つの理由は、構造的基礎と意味的基礎の不一致である。この点については、先述の通りである。もう一つは、意味的基礎を成す主述述語文の容認度とずれが見られる点にある。

まずはタイプ B であるが、容認度において主述述語文と大筋において一致する (例(7)(8)は平山 2013a : 102 より引用)。

- (7) 他比我年纪大。(彼は私より年齢が高い) → 他年纪大。(彼は年齢が高い) → 他是不是年纪大? (彼は年齢が高いですか)
- (8) *他比我书有趣。 → *他比我书有趣。 → *他是不是书有趣?

かくの如く、タイプ B と主述述語文は容認度がかなりの確率で一致している。更には、平山 (2013a) では主述述語文の主語 X の後に“是不是”を挿入した反復疑問文とも容認度が一致することが確認されている⁽³⁾。

そもそも主述述語文は X を主語、NW を述語とした主述フレーズである。主述フレーズの判断基準として、反復疑問文への変換可否は先行研究でもよく見られる手法である (朱徳熙 1982 : 97 ; 李臨定 1985 : 66)。例えば場所詞から始まる“北京是首都→北京是不是首都?” “教室里在上课→教室里是不是在上课?” と“马上去→*马上去不去?” というフレーズを例にとると、前者二例は反復疑問文に変換可能である。よって主述フレーズと認定される。一方後者一例は変換不可となる。主述フレーズとは認定されない。先述の主述フレーズの認定基準に従えば、主述述語文の主語の後に“是不是”が挿入可能となるのは必然となる。更には、反復疑問文“X 是不是 NW ?” の形成には主述述語文の構成規則がそのまま作用していると判断される。

議論を“比”構文に戻したい。先に述べた通りタイプ B は“X 是不是 NW ?” と容認度において基本的に一致している。それは“是不是”同様、“比 Y”が主述述語文 XNW の判定機能を有することを表す。更には、比較文の形成にも主述述語文の構成規則がそのまま作用している。

タイプ B 同様、タイプ A も意味的には主述述語文を基礎としている。

(3) X, N, W によって組み合わせられた文の成立容認度がタイプ B や“是不是”を用いた反復疑問文と一致しないこともある。この場合、成立した文は主述述語文 XNW 以外の構文 (例えば XN を主語とした主述文) となる (3.2., 4.2. の議論を参照)。

よって、両者の成立容認度は一致することが推測される。実際大筋において一致が見られる（詳細は第3章の議論を参照）。しかし、一部不一致も確認される。

(9) A. 現在の学生比过去时髦。B. ^{??}现在比过去学生时髦。

(10) A. 今年的玉华比去年能干多了。B. ^{*}今年比去年玉华能干多了。

上に挙げた例ではタイプBの容認度はかなり低い。しかしタイプAは高い容認度を示す。主述述語文XNWの構成規則が大きく反映しているとは言い難い。

以下本論では、次の点に主眼を置き議論を進める。

- (一) 領有者比較文タイプAの成立に対し、主述述語文は如何なる形で作用しているのか。
- (二) 例(9)(10)のような状況でタイプAが成立するのは如何なる要因からか。
- (三) (一)(二)に対して如何に整合性を持った説明を加えることができるのか。

2. 研究手法

先述の通り、平山(2013a)によるとタイプBと主述述語文の成立容認度には相関関係が見られる。その成果を土台に、タイプAの分析を進める。以下二点が主な着眼内容となる。

2.1. 領有者X/Yと被領有者Nの領属関係

第1章言及の通り、領有者比較文は主述述語文XNWを基礎としている。更にはXとNは領属関係を表している。当然、基礎となる主述述語文でも大主語Xと小主語Nは領属関係を表す。通常大主語と小主語が当該関係を表すペアは主述述語文の典型と考えられている（邵敬敏他

2009: 150)。それでは、本稿で議論する主述述語文 XNW 及び領有者“比”構文に展開される「領属」の諸相は如何なものだろうか。

“比”構文における領有者 X/Y と N の領有関係は、马真 (1986a, 1986b, 2016) で詳しく述べられている。平山 (2013a) でも大筋において踏襲されている。本稿でも、同様の基準に基づいて考察する。タイプ B の成立状況と対比すると、タイプ A の傾向性は次のように整理される。

- タイプ B と容認度が一致 = 主述述語文の形成メカニズムが大きく反映)

〈文成立の容認度が高いペア〉

- [1] “属性关系” (属性関係) : 事物と (能力, 性質を含めた) 属性との関係。例) 他的年纪 (彼の年齢)
- [2] “隶属关系” (隸属関係) : 有機的に結びついた全体と部分の関係。例) 他的眼睛 (彼の目)
- [3] “准领属关系” (准占有関係⁽⁴⁾) : 人とある種技能との関係。例) 他的围棋 (彼の囲碁)

〈文成立の容認度が低いペア〉

- [4] “质料关系” (原料関係) : 製品と原料の関係。例) 木头的桌子 (木製の机)
- [5] “类属关系” (類属関係) : 事物とその特徴との関係。例) 百年的树 (百年の木)

(4) 马真 (1986a, 1986b, 2016) の“领属关系”は本稿で示す「領属関係」と比べ狭義のものを指す。用語の混乱を防ぐ為、本稿では“准领属关系”を「准占有関係」と訳出する。

〈文成立の容認度高低が状況によって異なるペア〉

- [6] “**領属关系(占有関係⁽⁵⁾)**”：分離可能な領有と被領有の関係。
例) 我们的狗(私達の犬)
- [7] “**亲属关系(親族関係)**”：親類関係を含めた、友人関係、社会的上下関係等の幅広い人間関係。例) 他的姐姐(彼のお姉さん), 我的年纪(私の友人)

●タイプBと容認度に不一致が見られるペア = 主述述語文の形成メカニズムが断片的に反映

- [8] “**时地关系(時地関係)**”：事物と事物の存在する時間或いは場所との関係 例) 今年的气温(今年の気温)

2.2. Nの意味節点としての作用

次に、主述述語文の領有者Xと被領有者NにWを加えた三者の関係性を見て行きたい。当該構文において、述詞性語句Wは被領有者Nの性質を表す。よって、被領有者Nと直接的な関係を持つ成分となる。領有者X/Yは被領有者Nという媒介を通して間接的に述詞性語句Wと関係が結ばれる(楊成凱 1997; 袁毓林 2008)。媒介作用について、本稿では袁毓林(2008: 116)の意味節点(语义节点)という概念を拠り所としたい。以下の例文を見られたい(例(11)(12)は袁毓林 1994: 247より引用)。

(11) 王小明眼睛瞎了。(王小明は目が失明した)

(12) 李伟性格很开朗。(李偉は性格が明るい)

袁毓林(1994)によると、例(11)(12)において大主語X(“王小明”“李伟”)という情報がインプットされ、[人]という意味特徴が活性化される。その上で、[目, 性格]等の情報が拡散的活性化されているとある。

(5) 注(4)と同様の理由で“領属关系”は「占有関係」と訳出する。

更に、袁毓林（2008：33-35）では脳内の意味貯蔵がネットワーク方式で構成され拡散的活性化が行われるとする。被領有者 N の選択には領有者 X だけでなく、述詞性語句 W から活性化が行われる。その結果双方の活性化による合致が必要、最後に合致したものが意味節点として作用してくる、と主張している。

議論を比較文のタイプ A に移すと、邵敬敏（1990）でも同様の観点が示されている。述詞性語句 W の領有者 X との関係性の有無が文成立に大きく関わる事が主張されている。当該タイプの成立条件について、马真（1986a, 1986b, 2016）、平山（2010, 2011, 2013b, 2014）で詳細な議論は見られる。一方で、邵敬敏（1990）で指摘した W との関連性まで深く考察したものは見ることがない。この点を鑑みても、被領有者 N の意味節点機能は領有者比較文の成立可否を論ずる上でも無視することができない。

3. タイプ B と容認度が一致するタイプ

まずは、タイプ A の成立可否がタイプ B と一致するタイプを見ていく。これは同様に、主述述語文の成立可否と一致することにもなる。大きく合わせて三種類に分けられる。

3.1. 文成立の容認度が高いペア

該当ペアは、[1] 属性関係、[2] 隷属関係、[3] 准占有関係、となる。

3.1.1. [1] 属性関係

- (13) A. 他的年纪比我大。(彼の年齢は私より高い)
- B. 他比我年纪大。(彼は私より年齢が高い)
- XNW：他年纪大。(彼は年齢が高い)

- (14) A. 他的脾气比你好。(彼の気立てはあなたより良い)
 B. 他比你脾气好。(彼はあなたより気立てが良い)
 XNW: 他脾气好。(彼は気立てが良い)

上の例ではタイプB同様タイプAの容認度も高い。主述述語文XNWの発展型式と見なすことができる。属性要素はその領有者という全体を構成する上で密接不可分の抽象的付随要素（部分）となる。よって領有者X/Yと被領有者Nは「全体一部分」関係と見なされる。この場合、NW（“年纪大”（年齢が高い），“脾气好”（気立てがよい））という命題は、領有者X/Y（“他/我”“他/你”）という認知領域（cognitive domain）の存在を前提とする。被領有者Nの意味節点としての性格が見出しやすくなる。

3.1.2. [2] 隸属関係

当該ペアは、領有者X/Yと被領有者Nの間に「全体一部分」の関係性を有す。

- (15) A. 他的眼睛比你大。(彼の目はあなたより大きい)
 B. 他比你眼睛大。(彼はあなたより目が大きい)
 XNW: 他眼睛大。(彼は目が大きい)
- (16) A. 孩子的皮肤比大人嫩。(子供の皮膚は大人より柔らかい)
 B. 孩子比大人皮肤嫩。(子供は大人より皮膚が柔らかい)
 XNW: 孩子皮肤嫩。(子供は皮膚が柔らかい)

先述の如く、隸属関係における被領有者Nは領有者X/Yにおける部位を表す。述詞性語句W（“大”“嫩”）は身体部位である被領有者N（“眼睛”“皮膚”）の性質を表す。身体部位は明確な外延を有する。一方で、その地位は更に大きな外延を有する認知領域（全体）の存在によって保証される。更には、身体部位の特徴はその領有者のイメージ形成にも寄与する。それは、領有者X/Yと述詞性語句Wが間接的に関係性を持つことを

意味する。必然的に、被領有者 N の意味節点としての機能が浮かび上がる。更には、領有者 X/Y と被領有者 N には「全体と属性部分」という関係性が見出される⁽⁶⁾。

3.1.3. [3] 准占有関係

このグループにおける被領有者 N は領有者 X/Y の技能を表す。

- (17) A. 他的围棋比我下得好。(彼の囲碁は私より打つのが上手だ)
B. 他比我围棋下得好。(彼は私より囲碁を打つのが上手だ)
XNW : 他围棋下得好。(彼は囲碁を打つのが上手だ)

- (18) A. 小周的小提琴比小李拉得好。(周君のバイオリンは李君より演奏するのが上手だ)
B. 小周比小李小提琴拉得好。(周君は李君よりバイオリンを演奏するのが上手だ)

XNW : 小周小提琴拉得好。(周君はバイオリンを演奏するのが上手だ)

技能もヒトの有する属性である。“NV 得怎么样”という認知には、領有者 X/Y (“他/我” “小周/小李”) という認知領域の存在が不可欠となる。以上、N の意味節点と X/Y と N による「全体と属性部分」の関係が見出される。

(6) 被領有者 N の外延性の濃淡は、主述述語文の省略度にも影響される。袁毓林 (1994) では、心理属性と物理属性を表す成分を比較すると、前者は省略されやすく、後者は低くなりやすいとある (他心里非常难受。(彼は心の中が非常にづらい) → 他非常难受 (彼は非常にづらい); 他肚子非常难受。(彼はお腹が非常にづらい) → *他非常难受 (彼は非常にづらい))。

3.2. 文成立の容認度が低いペア

3.2.1. [4] 原料関係

(19) A. *木头的桌子比铁轻。

B. *木头比铁桌子轻。

XNW : 木头桌子轻。(XNW'⁽⁷⁾) (*木は机が軽い→木の机は軽い)

(20) A. ^{??}尼龙的衣服比棉布耐穿。

B. *尼龙比棉布衣服耐穿。

XNW : 尼龙衣服耐穿。(XNW') (*ナイロンは服が丈夫だ→ナイロンの服は丈夫だ)

上掲の関係において、NW（“桌子轻”“衣服耐穿”）の認知にX/Y（“木头/铁”“尼龙/棉布”）という材質は土台となり得ない。逆にX/Yの認知にはNの認知を必要とする。被領有者Nは意味節点とはなり得ない。また属性部分の機能も認知できない。X, N, Wから構成される文が中国語として正しくても、主述述語文XNWとしての読みは厳しくなる。XN（“木头桌子”“尼龙衣服”）を主語とした主述文と判断される⁽⁸⁾。

(7) XNW'は、X, N, Wの配列によって組み合わされた主述述語文XNW以外の文を表す。X, N, Wの配列には主述述語文としては容認できなくても、XNW'としては成立或いは容認度の比較的高い場合もある。その場合(XNW')(?XNW')のように記す。

(8) 連体修飾語の“的”の有無には様々な要因が絡んでくる。その主たる要素として領属関係を表すのか、属性様態を表すかという点が挙げられる。例えば“狐狸的尾巴”（狐の尾）は前者を表す。“狐狸尾巴”（化けの皮）は後者を表す（朱徳熙1982：143）。(19)(20)のX/Yである材質はNの属性を表す。朱徳熙(1982：143)の指摘と合致した現象と言える。

3.2.2. [5] 類族関係

- (21) A. *百年的樹比十年粗。(*100 年の木は 10 年より太い)
B. *百年比十年樹粗。(*100 年は 10 年より木が太い)
XNW : *百年樹粗。(?XNW') (*100 年は木が太い → 100 年の木は太い)
- (22) A. ?四个腿的桌子比三个腿贵。(四本足の机は三本足より高価だ)
B. ?四个腿比三个腿桌子贵。(四本足は三本足より机が高価だ)
XNW : ?四个腿桌子贵。(?XNW') (*四本足は机が高価だ → 四本足の机は高価だ)

上掲の例も、原料関係と同様の説明が成される。X/Y に表される特性は被領有者 N の存在が土台となる。よって、比較文及び主述述語文は何れも成立が難しくなる。仮にタイプ B から “比 Y” を取り去った形が中国語として成立しても主述述語文とは見なされない。XN を主語とした主述フレーズとしか捉えようがない。以上、N の意味節点の機能は見いだせない。更には、X/Y に対する属性部分としての性質も認定できない。

3.3. 文成立の容認度高低が状況によって異なるペア

3.3.1. [6] 占有関係

当該タイプにおける被領有者 N は譲渡可能な占有物を表す。

- (23) A. *小王的面包比小李好吃。
B. *小李比小王面包好吃。
XNW : *小李面包好吃。
- (24) A. *我的书比你有趣。
B. *我比你书有趣。
XNW : *我书有趣。

被領有者 N は、明確な外延を有する。NW (“面包好吃”) という事態は領有者 X/Y の性質を表していない。被領有者 N の意味節点機能及び領有

者 X/Y との「全体—属性部分」関係を見出すことができない。同時に、領有者比較文と主述述語文の不成立との相関関係が見出せる。

一方、述詞性語句 W が“多”の場合、容認度が大幅に上昇する（楊成凱 1997；木村 2002；馬真 1986a, 1986b, 2016；平山 2010, 2011, 2013a, 2013b, 2014）。

(25) A. 張三的衣服比李四多。（張三の服は李四より多い）

B. 張三比李四衣服多。（張三は李四より服が多い）

XNW：張三衣服多。（張三は服が多い）

(26) A. 他的獎品比我多。（彼の賞品は私より多い）

B. 他比我獎品多。（彼は私より賞品が多い）

XNW：他獎品多。（彼は賞品が多い）

そもそも、ある所有物の多寡はその所有者の漠然とした内面性を推し量る手がかりとなる（(25)では「服飾愛好家」「お洒落だ」、(26)では「優れた能力を持っている」等）。被領有者 N は一種の属性要素を表す。以上、被領有者 N の意味節点機能と領有者 X/Y との間に「全体—属性部分」関係が見出せる。

但し、このペアにおける文成立の必要条件（N の意味節点機能と X/Y と N の「全体—属性部分」関係）に対する認知フレームは、[1] 属性関係、[2] 隷属関係、[3] 准占有関係、のものとは異なる。これらのペアでは、X/Y と N の語彙的意味に依る部分が大きい。一方で例(25)(26)においては W（“多”）の果たす役割がより大きくなる。言わば、“XN 多 / YN 多”という構文的意味（constructional meaning）が大きく作用している。意味接点機能と「全体—属性部分」関係の認知フレームという点から見ると、上述の構文的意味により、[1][2][3] というプロトタイプからの拡張が行われたということになる。一方で、その拡張も主述述語文という枠組内で展開されたものである。タイプ A の成立条件が主述述語文を土台とする点では先述のペア [1][2][3] と共通性を持つ。

3.3.2. [7] 親族関係

(27) A. *你的姐姐比小王漂亮。

B. *你比小王姐姐漂亮。

XNW : *你姐姐漂亮。(XNW') (*あなたは姉がきれいだ→あなたの姉はきれいだ)

(28) A. *王老师的学生比杨老师活跃。

B. *王老师比杨老师学生活跃。

XNW : *王老师学生活跃。

当該グループにおける親族関係は親類関係を始め、友人、職場の上下等幅広い人間関係を表す。領有者比較文の成立は困難が生じる。よってXNWの成立如何に関わらず、主述述語文を土台とした発展関係は見いだせない⁽⁹⁾。親族関係においても被領有者N(“姐姐”“学生”)の有する性質は領有者(“你/小王”“王老师/杨老师”)とは別物、と捉えるのが自然な読みとなる⁽¹⁰⁾。必然的にNの意味節点機能と領有者X/Yとの間に「全

(9) 注(10)で言及した内容とも関連するが、(27)に挙げた“你姐姐”は文脈的に要素により「あなたは妹が」という読みの可能となる場面も存在するかもしれない。但し「彼の妹」の方が自然な読みとなる(母語話者の語感に合致している)ことは、本文中の議論の他にも①「XNが「人称代名詞+家族関係」の場合“的”が省略可」(例.“我的妹妹/我妹妹”, “他的妈妈/他妈妈”)という説明は多くの初級教科書で目にすることができる、②当該ペアのXN(“我妹妹”“他妈妈”)については多く連体修飾という枠組で議論が展開されている(杉村2001; 張敏1998: 339-361)、等諸々の要素からも推察される。

(10) 本文中で「自然な読み」という表現を用いたが、言語環境が与えられれば、述詞性語句WがX/Yの性質を表すという読みも可能となり得る。例えば“他母亲病了”という例は、「彼のお母さんは病気になった」以外にも「彼はお母さんが病気になった」という意味も表す(徐烈炯, 刘丹青2018: 52)。更には、領有者Xの後にポーズが置かれると、領有者Xと述詞性語句Wの関係性が浮き彫りになる〔例. 我啊, 孩子比他大, 年纪可比他小(私は、子供が彼[の子供]より大きい、年齢は彼[の子供]より若い)〕(朱德熙1982: 90)。

体一属性部分」関係は見いだせない。

一方、述詞性語句 W が“多”となった場合である。[6]の占有関係同様、容認度も上昇する。

(29) A. [?]我的朋友比你多。(私の友人はあなたより多い)

B. [?]我比你朋友多。(私はあなたより友人が多い)

XNW: 我朋友多。(私は友人が多い)

(30) A. [?]我的孩子比你多。(私の子供はあなたより多い)

B. [?]我比你孩子多。(私はあなたより子供が多い)

XNW: 我孩子多。(私は子供が多い)

上掲例の容認度上昇は、占有関係と同様の要素が見出せる。人間関係の多寡は領有者 X/Y の内面や境遇を浮かび上がらせる。よって被領有者 N には意味節点としての機能が見出せる。更には、領有者 X/Y との「全体一属性部分」としての関係を認めることができる。また、このペアにおける意味節点機能と「全体一属性部分」関係に対する認知フレームも、“XN多/YN多”という構文的意味 (constructional meaning) によるものである。タイプ A の成立にも、認知フレームのプロトタイプからの拡張が見出せる。この種の拡張が主述述語文という枠組を土台として展開する点は 3.3.1. で述べた通りである。

4. タイプ A の容認度がタイプ B と一致しないペア

当該ペアは、[8] 時地関係が該当する。被領有者 N の性質により状況が異なる。

4.1. 被領有者 N が外延性を持たないタイプ

被領有者 N が明確な外延を持たない場合、タイプ B 及び主述述語文の容認度も高くなる。

- (31) A. 今年的气温比去年高。(今年の気温は去年より高い)
B. 今年比去年气温高。(今年は去年より気温が高い)
XNW: 今年气温高。(今年は気温が高い)
- (32) A. 西北的地势比东南高。(西北の地形は東南より高い)
B. 西北比东南地势高。(西北は東南より地形が高い)
XNW: 西北地势高。(西北は地形が高い)

当該タイプにおける被領有者 N (“气温” “地势”) は輪郭が不明瞭である。よって、NW (“气温高” “地势高”) という命題の充足には、領有者という認知領域が不可欠である。言わば、時間や場所に付随した属性要素と見なされる。被領有者 N には意味節点の機能が見出される。更には、領有者 X/Y との間に「全体—属性部分」という関係性も読み取ることができる。

4.2. 被領有者 N が外延性を有するタイプ

被領有者 N が明確な輪郭を有す場合、主述述語文 XNW をベースとした拡張関係を見出しにくい。

4.2.1. 領有者が場所を場合

- (33) A. 家乡的菜比外地好吃。(ふるさとの料理はよその土地よりおいしい)
B. 家乡比外地菜好吃。(ふるさとはよその土地より料理がおいしい)
XNW: *家乡菜好吃。(XNW') (*ふるさとは料理がおいしい)
→ふるさとの料理はおいしい)
- (34) A. 北京的马路比天津宽。(北京の大通りは天津より広い)
B. 北京比天津马路宽。(北京は天津より大通りが広い)
XNW: *北京马路宽。(XNW') (*北京は大通りが広い→北京

の大通りは広い)

上掲の例(33)(34)におけるタイプBは容認度が低い。よって中国語としての容認度が高くても、主述述語文XNWとは考えづらい。被領有者Nは領有者X/Yの属性部分を表していると言えなくもない。例えば(33)の“菜”(料理)はそれぞれの地域生活に必要な不可欠な要素である。(34)の“马路”(大通り)は各都市を特徴づける建造物の一種である。

一方で、領有者X/Yは被領有者Nの属性としての要素も合わせ持つ。(33)の“菜”は往々にして、それぞれの地域独特の味付けや文化背景を併せ持つ。特に“家乡菜”(郷土料理)、“外地菜”(よその土地)の料理のように語彙化した表現が見られることから分かりやすい。同様に、(34)の“马路”(大通り)等建造物に関しても形状や大きさなど特性の差異が現れてくる。タイプB及び主述述語文としての認定に困難が出るのは、先述の要素(X/YがNの属性と認識される)が色濃く表れた現象と解釈される。

一方で、タイプAの容認度は大幅に上昇する。この点は領有者Xの後に“的”が挿入されることで、「X/Yは属性」という読みが排除される⁽¹¹⁾。そして、両者に「全体—部分」という関係性が見出しやすくなったと考えられる。同時に、被領有者Nの意味節点としての機能も見出しやすくなる。

また、上掲の例におけるタイプAの成立は主述述語文の作用によるものではない。“X的N比YW”というタイプAの構文的意味(constructional meaning)の作用によるものと見なされる。意味節点機能と「全体—属性部分」関係の認知フレームが、主述述語文を跳び越えて、タイプAという領有者比較文まで拡張されたという周縁的な例と捉えられる。

(11) 領属関係XNと“X的N”の違いは、注(8)を参照。

4.2.2. 領有者が時間を表す場合

まずは、被領有者 N が特定の同一人物となる例である。

(35) A. 今年の玉華比去年能干多了。(今年の玉華は去年よりずっと有能だ)

B. *今年比去年玉华能干多了。(今年は去年より玉華がずっと有能だ)

XNW : *今年玉华能干多了。(XNW') (*今年は玉華がずっと有能だ → 今年玉華はずっと有能だ)

(36) A. 十年前的我要比现在更糊涂。(十年前の私は現在よりずっと愚かだ) (刘月华等 2019 : 835)

B. *十年前比现在我更糊涂。(十年前は現在より私がずっと愚かだった)

XNW : *十年前我更糊涂。(XNW') (*十年前は私がずっと愚かだった → 十年前私はずっと愚かだった)

当該例におけるタイプ A の成立容認度の高さは马真 (1986a, 1986b, 2016) 以外に刘月华他 (2019 : 835) に言及が見られる。一方で、タイプ B は成立不可となる。よって XNW は中国語として成立しても、主述述語文としては考えづらい。

ここまでタイプ B の成立と主述述語文をベースとした拡張関係を認定する要素として、N に意味節点と属性部分の機能があることを主張してきた。この点を踏まえて被領有者 N の特徴を考えてみたい。(35)の“玉華”(玉華)、(36)の“我”(私)は特定人物である。その存在は“今年”(今年)、“去年”(去年)や“十年前”(10年前)、“现在”(現在)という時間軸から自然に推察されるものではない。また成立グループ〔例、(13)の“他的年纪”(彼の年齢)、(15)の“他的眼睛”(彼の目)〕における被領有者 N (“年纪”“眼睛”)は属性を表す。領有者 (“他”)と異なり具体的な輪郭がプロフィールされることはない。一方、(35)(36)における N (“玉

华”，“我”）は明確な輪郭を有し，“今年／去年”“十年前／現在”に対する属性要素と捉えるには難がある。その特徴が，タイプBが高い容認度を示せない，即ち主述述語文からの発展関係が見出しにくい点と繋がってくる。それでは，タイプAの容認度の高さは如何なる要因が作用しているのか。平山（2011, 2013b：112）では「ヒトという範疇の構成メンバー」と捉えられ為との主張がある。しかし何故タイプAの中では「ヒトという範疇の構成メンバー」という抽象的側面が際立つのか，合理的な説明が見られない。この問題に対して，①被領有者Nの位置づけ，②構造助詞“的”の影響力，③述詞性語句Wの時間的特徴，から解明を試みたい。

まずは被領有者Nの性格である。領有者X/Yはそれぞれ時間軸上の一点である。ある時間の存在は物ではなく事件性を参照点としてより強く印象付けられやすい。よって，被領有者NがNWという事柄の参照点として認知されれば容認度も高くなることが推測される。平山（2011, 2013b：113）では，タイプAにおける被領有者Nについて「話者の中にある時間に対する何らかのイメージを与えた要素になっている」という主張が見られる。本稿の主張と照らし合わせると「何らかのイメージを与える」というのは「NWが際立った事件性を示す」ことに繋がる。事件の主体が明確であるほど事件事態の際立ちもより高くなる。

上述の点を踏まえた上で，述詞性語句Wを観察したい。述詞性語句は時間特性から二種類に分けられる。一方は個体述詞（個体谓词，individual-level predicate）である。その描写対象はある個体の属性を表す。ある種の永続性と常態性を有す。もう一方は段階述詞（階段谓词，stage-level predicate）である。その描写対象は，時間軸上特定の非恒常的なものとなる（Carlson 1977, 1989；徐烈炯 1999：179-180；胡建华，石定栩 2005；刘丹青 2002, 2018；寇鑫，袁毓林 2019⁽¹²⁾）。当グループにおける領有者

(12) “individual-level”と“stage-level”の二種の中国語訳について，“个体谓

は X/Y という時間軸上の異なる点にある。対応する述詞性語句 W も一過性の様相（状態）を呈す。その結果、段階述詞としての要素を帯びてくる⁽¹³⁾。個体述詞と逆に、段階述詞は類を表す主語との相性が悪く、特定性や限定性を帯びた主語との相性が良い（劉丹青 2018：11）⁽¹⁴⁾。段階述詞の性格からすれば NW を形成する上掲例“玉华”，“我”は絶好の相性となる。

次に構造助詞“的”の影響に言及する。成立グループの“X 的 N”（他的年纪；我的眼睛；小周的小提琴）について自体は限定性（definite）を表す。一方で、N 自体は“X 的 N”という構造の中では抑制を受けるが、裸名詞としては類を表す。類は内包をプロファイルし外延を抑制するという特徴を持つ（劉丹青 2002：411）。この点は「属性部分」という発想にも自然と繋がりやすい。然るに，“玉华”“我”等特定（specific）の人物になると「属性」とは連想しにくい。領有者 X/Y と被領有者 N の語彙の意味だけでは領属関係を示すのに困難をきたす。当然「全体—部分」関係を表すにも大きな溝が生じる。これに対して“的”の機能により、領属関係という一定の意味整合が保証される。同時に「全体—部分」関係の解釈

詞”“阶段谓词”の他に劉丹青（2002, 2018）では“属性谓语（属性述語）”，“事件谓语”（事件述語）という訳出が見られる。本稿では大多数の先行研究と同様前者の表現を用いる。

(13) 比較文で用いられる W には多く形容詞が用いられる。形容詞はその性質上多く個体述語と連想される。一方で、劉丹青（2018：5）では形容詞も文脈的要素等から段階述語と判断されることが指摘されている。例えば「大阪府豊能郡能勢町山辺の住民から十日夜，「水道の水が石油臭い」という苦情が十数件，同町役場に相次いだ」という文において「油臭い」はある一時の臨時的な状態を表す。よって、段階述語と判断される。

(14) 劉丹青（2018：11）から例を挙げておく。例えば“陕西人爱吃面食。（陕西の人は小麦粉食品を食べるのを好む）/*陕西人吃了面食。”という例において，“陕西人”は類を表すので個体述詞“爱吃面食”と結びつく。一方段階述詞“吃了面食”（小麦粉食品を食べた）とは結びつかない。

も施しやすくなる。更には、先に述べた段階述詞 W の機能が合わさり、被領有者 N の事件性という属性要素の側面が浮き彫りになる。

以上、構造助詞“的”の機能と W の段階述詞としての機能が合わさり、被領有者 N は意味節点としての機能を発揮しやすくなる。更には、被領有者 N は事件性という属性要素を帯びる。その結果“X 的 N 比 YW”という構文的意味が文の成立度を高めた現象と言える。以上の例においても、意味節点と「全体—属性部分」関係の認知には主述述語文という枠組を越えた“X 的 N 比 YW”への拡張が見出せる。

以下は、被領有者 N が一般名詞の場合である。

- (37) A. [?]今天的报纸比昨天有意思。(今日の新聞は昨日より面白い)
 B. *今天比昨天报纸有意思。(今日は昨日より新聞が面白い)
 XNW : *今天报纸有意思。(XNW') (*今日は新聞が面白い→
 今日の新聞は面白い)

- (38) A. 现在的学生比过去时髦。(現在の学生は過去よりモダンだ)
 B. [?]现在比过去学生时髦。(現在は過去より学生がモダンだ)
 XNW : [?]现在学生时髦。(XNW') (*現在は学生がモダンだ→
 現在の学生はモダンだ)

上掲例においても、タイプ B の容認度は高くない。XNW が成立しても、主述述語文ではなく、領有者 X (“今天”“現在”) を状語とした連用修飾フレーズと判断される。タイプ B と主述述語文の成立度に難が生じるのは、X/Y と N の語彙の意味から属性部分的要素の感じられない点にある。例えば(37)を見ると、現代社会において新聞は 1 日 1 日の生活における発行物である。(38)の“学生”についても、各時代における学校教育と学生の存在は想像に難くない。但し一方で、これらはある時間を構成する必要不可欠な要素とは言い難い。領有者 X/Y より輪郭が明瞭である。よって、語彙の意味だけで N の意味節点や領有者 X/Y との「全体—属性部分」の関係を見出しにくい。

これに対して、“的”を用いることで「全体一部分」としての立ち位置が浮かび上がる。次にNWの事件性として考察したい。“X的N”という構造自体は限定性を表す。よって、段階述詞Wと一定の相性を持つ。NはNWという事態の認知参照点として読みとりやすくなる。実際タイプAの容認度も全般的には高くなる。但し、一方で場合によっては完全容認とまでは至りにくい。“X的N”が特定性を帯びる一方、被領有者Nの語彙的意味そのものは類を表す。その要素が“X的N”という構造内においても段階述詞Wとの相性度を幾分下げる要因となり得る。

以上、(37)(38)においても、“X的N比YW”という構文的意味の影響力が見出せる。先の構文的意味により、被領有者Nは意味節点として機能する。そして、領有者X/Yと被領有者Nの間に「全体—属性部分」関係が形成される。更には上述の意味節点機能と「全体—部分」関係に認知には、主述述語文という枠組を跳び越えた拡張が見出せる。上掲の例(37)(38)も周縁的なものとなる。

5. 結 論

本稿では、タイプAの形成メカニズムについて主述述語文との形成メカニズムを指標として議論を展開した。更には、タイプBが“是不是”を用いた反復疑問文同様主述述語文の判定基準になり得るという性格を生かして、分析を行った。そして、タイプAの成立には被領有者Nによる意味節点機能、領有者X/Yと被領有者Nの「全体—属性部分」関係が鍵となることが発見された。具体的プロセスは、以下の三種となる。

- (一) X/Yと被領有者Nの語彙的意味から被領有者Nの属性的性格が見出される。その結果、意味節点と「全体—属性部分」関係が認定される。その形成メカニズムは主述述語文のものを基礎とする〔1〕属性関係、〔2〕隷属関係、〔3〕准占有関係、

一部〔8〕時地関係)。

- (二) 領有者 X/Y と被領有者 N の語彙の意味からは被領有者 N の属性要素が強く見出されない。属性関係を見出すには“XN 多/YN 多”という構文的意味の補助が必要となる。その結果、意味節点と「全体—属性部分」関係が形成される。その認知フレームは主述述語文という範囲内で拡張が生じている（〔6〕占有関係,〔7〕親族関係)。
- (三) 被領有者 N の属性要素は領有者 X/Y と被領有者 N の語彙の意味, “XNW/YNW” という構文的意味からも見出すことができない。タイプ A の成立に主述述語文を土台とした拡張関係は見いだせない。意味節点と「全体—属性部分」関係の認定には主述フレーズという枠組みを跳び越える。その結果, “X 的 N 比 YW” という構文的意味が直接作用する（一部〔8〕時地関係)。

以上, 意味節点と「全体—属性部分」関係の認知フレームは, 主述述語文を巡り, (一) (二) (三) の順にプロトタイプから周縁的なものへの拡張を辿っている。

参考文献

(中国語)

范晓主编 (1998) 《汉语的句子类型》, 太原: 书海出版社。

胡建华, 石定栩 (2005) 完句条件与指称特征的允准《语言科学》第 5 期。

寇鑫, 袁毓林 (2019) 违反复杂名词短语限制的语义条件及其语用解释《汉语学报》第 2 期。

李临定 (1985) 主语的语法地位《中国语文》第 1 期。

刘丹青 (2002) 汉语类指成分的语义属性和句法属性《中国语文》第 5 期。

刘丹青 (2018) 制约话题结构的诸参项——谓语类型, 判断类型及指称和角色《当代语言学》第 1 期。

刘月华 潘文娉 故韡 (2019) 《实用现代汉语语法 (增订本)》, 北京: 商务印书馆。

- 马真(1986a)“比”字句内比较项Y的替换规律试探《中国语文》第2期。
- (1986b)“比”字句新探《アジア・アフリカ言語文化研究》总第31期, (陆俭明, 马真著(1999)《现代汉语虚词散论》, 179-203, 北京: 语文出版社所收)。
- 马真(2016)《现代汉语虚词研究方法论(修订本)》商务印书馆。
- 孟维智(1987)关于一个“比”字句的分析,《语文研究》第1期。
- 平山邦彦(2010)“他比我年纪大”类的“比”字句——兼谈“他的年纪比我大”《东方语言学》第7辑。
- 平山邦彦(2011)汉日比较句“他的年纪比我大”和“彼の年齢は私より上だ”《汉日对比研究论丛》第2辑。
- 平山邦彦(2013a)谈主谓谓语句——以“他比我年纪大”类“比”字句为切入点《汉语语法研究的新拓展(六)》, 上海: 上海教育出版社。
- 平山邦彦(2014)论“他的年纪比我大”类“比”字句《汉语学习》第3期。
- 杉村博文(2001)“我妹妹”和“我的妹妹”的位置《现代中国語研究》创刊·第2期, 东京: 朋友书店。
- 邵敬敏(1990)“比”字句替换规律刍议《中国语文》, 第6期。
- 邵敬敏, 任芝镛, 李家树, 税昌锡, 吴立红(2009)《汉语语法专题研究(增订本)》, 北京: 北京大学出版社。
- 徐烈炯(1999)名词性成分的指称用法, 载徐烈炯主编《共性与个性——汉语语言学中的争议》, 北京: 北京语言文化大学出版社。
- 徐烈炯, 刘丹青(2018)《话题的结构与功能(增订本)》, 上海: 上海教育出版社。
- 许国萍(2007)《现代汉语差比范畴研究》, 上海: 学林出版社。
- 杨成凯(1997)“主主谓”句法范畴和话题概念的逻辑分析——汉语主宾语研究之一《中国语文》, 第4期。
- 袁毓林(1994)一价名词的认知研究,《中国语文》第4期。
- 袁毓林(2008)面向当代科技的语言研究的理论方法《基于认知的计算机语言学》, 北京: 北京大学出版社。
- 张敏(1998)《认知语言学与汉语名词短语》, 北京: 社会科学出版社。
- 张旺熹(1993)主谓谓语句的语义模式《世界汉语教学》第3期。
- 朱德熙(1982)《语法讲义》, 北京: 商务印书馆。
- (1983)关于“比”字句《语法研究和探索(一)》, 北京: 北京大学出版社。

（日本語）

木村英樹（2002）中国語二重主語文の意味と構造，西村義樹編『認知言語学Ⅰ：事象構造』，東京：東京大学出版会。

平山邦彦（2013b）中国語の領属性“比”構文について，『拓殖大学 語学研究』第129号。

（英語）

Carlson, Gregory N. 1977 Reference to kinds in English .Ph.D. dissertation, University of Massachusetts, Amherst.

Carlson, Gregory N. 1989 On the semantic composition of English generic sentences. In Gennaro Chierchia, Barbara H. Partee & Raymond Turner (eds.) *Properties, Types and Meaning. Vol. II : Semantic Issues*, 167-192. Dordrecht : Kluwer Academic Publishers.

〔付記〕

本稿は“第十届现代汉语语法国际研讨会（The 10th International Conference on Contemporary Chinese Grammar (ICCCG-10)）”における口頭発表に加筆修正を加えたものである。また，平成31年度言語文化研究所研究助成の成果である。

（原稿受付 2020年6月23日）